

機関番号：12603

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520599

研究課題名（和文） ペルシア語書簡術・文章術とイラン・イスラーム文化

研究課題名（英文） Persian epistolary and prose art and Perso-Islamic Culture

研究代表者 渡部 良子（WATABE RYOKO）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：10447500

研究成果の概要（和文）：前近代のイラン、トルコ、中央・南アジアなどペルシア語を書記言語として共有した地域においては、書記官僚の技術としてペルシア語書簡術が発展し、伝統文学・文化の形成に影響を与えた。本研究では、最初期～14世紀のペルシア語書簡術の指南書・書簡集写本を収集・整理し、文人書記達が培ったペルシア語イスラーム文化に基づく教養・思想を研究する基礎を築いた。

研究成果の概要（英文）：In pre-modern Iran, Turkey, Central Asia and South Asia where Persian was commonly used as a written language Persian art of letter-writing which was an important part of bureaucrat techniques developed and influenced in the formation of traditional culture and literature. In this study I collected and researched historical materials on Persian letter-writing like manuals and collections of letters and provided the foundation of studies on cultures and thoughtsof secretaries in Perso-Islamic culture.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2007 年度	900,000	270,000	1,170,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総 計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：前近代イラン・イスラーム文化・社会史

科研費の分科・細目：人文学・史学・東洋史

キーワード：歴史 イラン ペルシア語 イスラーム文化 官僚 モンゴル 文書行政 文書学

1. 研究開始当初の背景

イラン、トルコ、中央アジア、インドなど、ユーラシアのイスラーム圏の広大な領域では、前近代を通しペルシア語が書記言語として用いられ、それぞれの地域の伝統文化・文学の形成に影響を与えた。この「ペルシア語

文化圏」におけるペルシア語・イスラーム文化がいかにして発展・拡大したのかはユーラシア・イスラーム圏の重要な歴史研究の課題であるが、ペルシア語書記言語の広まりを促進した要因の1つとして考えられるのが、これらの領域に成立したイスラーム諸王朝・国家の文書行政においてペルシア語が使用さ

れたことである。ペルシア語の文書起草術・書簡術は、アラビア語イスラーム書記術の影響のもと 10 世紀頃から発達し、書簡術指南書や書簡集が多数編纂されたことが知られている。これらの書簡術文献は、知的エリートであるペルシア語書記官僚の教養・思想を時代と地域を越えて伝達するメディアであり、ペルシア語文化圏の共有文化を明らかにする貴重な史料であるが、現存する文献の多くはまだ写本のまま十分に研究がなされていない。ペルシア語文化圏の諸国家に普及したペルシア語文書行政の技術、またその書簡作法や文章術を通して共有されたペルシア語文化の様相を明らかにするには、これらの書簡術文献史料を調査し、その詳細な書誌情報を整理することが必要である。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究では、ペルシア語書簡術文献の現存が確認できる最初期の 11 世紀から、ペルシア語書簡術の様式と理念、および文章技巧が基礎的な成熟を遂げ、さらにモンゴル帝国の支配という歴史的事件によりペルシア語文書行政のあり方に変化が生じた 14 世紀までを主たる対象として、現存するペルシア語書簡術指南書、書簡集の写本を可能な限り収集し、その編纂背景、構成、文章術や書簡作法に関する言説に関するデータを整理して目録化し、ペルシア語書簡術文献の様式的発展と、その中に窺われる書簡作法の変化を明らかにする研究の基礎を整えることを目的とした。またそれと同時に、ペルシア語書簡術の担い手である書記官僚達が著した韻文・散文の宮廷文学作品の収集・分析を行い、書簡術において最も重視される位階の儀礼や君主に関わる修辞が、ペルシア語宮廷文学における王権の表象、レジテ

イマシー（支配の正当性）とどのような共通性を持つのかを考察し、書記官僚という知的エリートが担ったペルシア語書簡術・文学技巧の政治権力との関わりを明らかにする史料環境と方法論を準備することを目指した。

3. 研究の方法

イランの主たるペルシア語写本所蔵機関である議会図書館、マレク図書館、国立図書館、写本のみならず世界各地から収集した写本マイクロフィルムのコレクションを蔵するテヘラン大学中央図書館、英国の British Library で調査を行い、ペルシア語書簡術指南書・書簡集文献の写本を調査・複写し、13-14 世紀のモンゴル支配時代の作品を中心に、各作品の来歴・構成・内容のデータを整理した。それにより、ペルシア語の書簡作法とその理論がどのように発達していったかを跡づけると同時に、モンゴル帝国の一分家イル・ハン朝(1258-1335)とその後継王朝があらたにイラン高原に導入したモンゴル帝国文書行政の諸規範が、ペルシア語書簡術の中でどのように解釈・受容され、その後のペルシア語文書・書簡様式に変化をもたらすことになったのかを、モンゴル時代の現存文書とペルシア語書簡術指南書の叙述を比較検討することで明らかにすることを試みた。

これらの作業と平行して、主に書記官僚が担ったペルシア語宮廷文学において、王権がどのように表象・正当化されるのかを明らかにするために、モンゴル支配時代に流行を見た韻文による歴史叙述作品を収集・調査した。ペルシア語韻文歴史叙述によるモンゴル支配の表象は、イスラーム文化圏の外界から異教徒として登場したモンゴルの支配をペルシア語イスラーム文化の中に位置づけて正当化しようとする知的エリート達の営みを

端的に表すものであり、書簡作法における君主・支配者の表象とともに、イラン・イスラーム文化と国家・権力の関わりを考察する有効な題材となる。この観点から、未校訂の地方史を含むペルシア語韻文史作品の写本から、モンゴル君主のレジティマシーがいかに表現されているかを調査・研究し、ペルシア語書簡術の中で発展した王権儀礼の文化的背景を理解する手がかりとした。

4. 研究成果

以上の研究により、以下の研究成果が得られた。

(1) 11-14 世紀の現存するペルシア語書簡術指南書・書簡集作品の情報を、新発見・未調査の写本も含め、現在確認しうる限り網羅的に収集し、各作品の来歴・構成・書記術に関する理論・言説に関するデータを整理し得た。これにより、ペルシア語書簡術が最初の発展・成熟を果たした 11-14 世紀において、書簡の作法・規則がどのような関心のもとに形成されたのか、広域に拡大してゆくペルシア語書簡術の最初の発展の過程を跡づけ、その技術・理念はいかにして伝達されたのかを明らかにする研究の基礎を作ることができた。また、このような書簡術文献がいかなる作品と合本されているか、どのような作品が書写・流布させられているかという、書簡術文献の流布の様態から、書簡術がいかにして伝達・継承されたのかということについても可能な限りの情報を集め得た。

(2) アラビア語イスラーム書記術の影響のもと発達したペルシア語書簡術が、13-14 世紀のモンゴル政権の支配とモンゴル文書行政の同ニュニより、どのような変化を被ったのか。また、書記官僚は、モンゴル帝国の王権

観を反映した文書の様式・規範を、ペルシア語イスラーム文化の中でどのように解釈したのかという問題に、文書史料と書簡術文献の対比により一定の解答を示し得た。これにより、文書学研究において書簡術文献の情報を活用しうることを明らかにできた。

(3) モンゴル時代の韻文史叙述作品という宮廷文学の 1 ジャンルの研究により、イスラーム文化に裏打ちされたペルシア語文学がいかにして王権の儀礼、支配の正当性に密接に関わってきたのか、「異民族」モンゴルの支配の正当化という事例を通し、明らかにした。これにより、ペルシア語文化圏におけるイスラーム王朝のレジティマシーにおいて、イスラーム法の担い手であるウラマーの理論・言説のみならず、書簡術の担い手である書記官僚たちにより培われたペルシア語文学・文化が大きな役割を果たしていることを示すことが出来た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

渡部良子「Daftar-iDilgushi に見えるシャバンカーラ史の叙述：モンゴル時代史研究における韻文史書利用の可能性」『上智アジア学』25 (2007): 49-80.(査読なし)

〔学会発表〕(計 3 件)

渡部良子「インシャー史料におけるペルシア語モンゴル命令文について」ワークショップ「モンゴル帝国期多言語文書史料群と歴史研究—イランと中国を中心として」(2010 年 12 月 11 日、早稲田大学)

渡部良子「14 世紀モンゴル支配期イランにおける文書行政と伝統的ペルシア語書記術：文書の構成と定型的表現を手がかりに」AA 研
フォーラム（2009 年 11 月 5 日、東京外国語
大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

WATABE Ryoko, “Images of Mongols and Their
Legitimacy in Persian Literatures in the
Ilkhanid Period”, International Workshop:
The Formation of Perso-Islamic Culture:
The Mongol Period and Beyond (ILCAA, Tokyo
University of Foreign Studies, 1st March
2009)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡部 良子 (WATABE RYOKO)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文
化研究所・研究員

研究者番号：10447500